

こども通信

塚田こども医院

小児科・アレルギー科
漢方内科

上越市栄町 2-2-25
TEL 025-544-7777(代)
025-544-7779(保育室)
FAX 025-544-8456

ホームページ
www.kodomo-iin.com



先月は季節の変わり方が激烈でした。初めの頃は寒さを感じ、新スト

ブで暖を。月末は30度を超える真夏日になり、クーラーが必要に。

暑さにまだ慣れていないので、熱中症にならないよう、十分にご注意を。このままでは夏はど

んな天候になるのか、今から心配です。

＊ ＊
今月は当院に「記念日」が続きます。12日はわた

ぼうし病児保育室開設21周年、14日は医院開院32周年です。

思えば長くなってきました。33歳で開業(若い!)。当時は小児科専門の医院はまだ少なく、多くの子どもたちは内科や産婦人科を受診していたようです。

「子どもは小児科へ」そんなメッセージを込めて医院名を「こども医



院」としました。今ではもっと洒落たネーミングにしている小児科医院も多くなり、何となく「老舗(しにせ)」っぽくなりましたが(笑)。

次第に、子どもの医療だけではなく、子育て環境の整備も必要だと

いうことを実感。2001年に病児保育室を併設するに至りました。「断らない」をモットーに受

け入れています。今では全国で2番目に大きな施設になっています。

この間、さまざまなことがありました。それらを解決し、乗り越えて今があるわけですが、職員はもとより、地域の方々に支えていただいたお陰と感謝しています。

医院も病児保育室も、これからも元気に運営し、地域の子どものための

感染症情報

新型コロナウイルス感染症は全国的には減少傾向にあり、ようやく厳しい行動制限がなくなり、普通の日常生活に戻ってきています。マスクについても、周囲との間隔が十分に取れていれば不要とのこと。乳幼児のマスク着用も無理することのないようにお願いします。

しかし完全に収束したわけではなく、一定の発生は続いています。また今後新しい変異株の出現があるかもしれません。個人の感染予防対策は継続して欲しいと思います。

またワクチン接種は感染予防に役立つものです。5歳以上の子どもたちへの接種も積極的に受けるようにしてください。

一般の感染症では、**感染性胃腸炎**の発生が増えました。園や家庭によっては集団発生もあるようです。多くはウイルス性ですが、夏場は細菌性腸炎(病原性大腸菌、サルモネラ、カンピロバクターなどによる食中毒)も多くなります。食品や調理の衛生管理も注意を払ってください。また、子どもたちは脱水や低血糖になりやすく、ぐったりしている場合はすぐに受診してください。

このほかでは**溶連菌感染症**、**アデノウイルス性咽頭炎**などが少しずつ発生があります。いずれも咽頭痛と発熱が特徴で、登園停止の扱いです。溶連菌感染症には抗菌薬による治療をおこないます。

ヘルパンギーナや**手足口病**といった夏かぜも少数ですが見かけます。コロナ禍で、感染症の流行パターンは変化してきました。

育ちを応援したいと考えます。今後とも、どうぞよろしくお願いたします。

子宮頸がんワクチンは土曜午前

●子宮頸がん予防のワクチンは通常の予防接種の中で受けていただくことができます。しかし、今後希望者が多くなることが予想されるので、**土曜午前中の予防接種については子宮頸がん予防接種を優先することになりました。**予約は医院の専用サイトからお願いします。

今月の予定

院長・副院長出務

ファミリーサポートセンター研修 14日

上越市夜間診療所勤務 15日

上越有線放送「健康ライフ」21日

FM上越「Dr. ジローのこども健康相談」

毎週木曜午後1:20頃～(76.1MHz)

感染症情報(毎週)

FM上越: 木曜午後1:35頃～

上越有線放送: 月曜午後6時～(番組内)

医院ホームページ内

☆新型コロナウイルス感染症はやや下火に向かっていますが、今後とも入室前のトリアージを行い、必要に応じて抗原検査も実施していきます。

積極的勧奨の再開

子宮頸がんは女性のがんとして恐れられています。20～30代で急増し、日本では年間1万5千人の女性が発症していると報告されています。

子宮頸がんは初期の段階ではほとんど自覚症状がなく、定期的な健診を受けていないとその発見が遅れてしまいがちです。自覚症状がでてからでは、すでにがんが進展している可能性があります。

●がん予防のワクチン

子宮頸がんの多くは、ヒトパピローマウイルスによる感染が原因です。このウイルスに感染しても、その大部分は自然に排除されますが、もし感染した状態が長く続くと、子宮頸がんを発症させることがあります。またこのヒトパピローマウイルスは特別な人だけが感染するのではなく、多くの女性の方が感染するありふれたウイルスです。

このヒトパピローマウイルスに対する複数のワクチンがすでに製造さ

れています。海外の多くの国ではすでに導入されていて、12歳前後の女児からの接種が推奨されています。

日本では10歳以上（サーバリックス）、または9歳以上（ガーダシル）の女性が対象です（法定接種として行う場合には小学6年～高校1年に相当する年齢のうち女性が対象）。

3回はすべて同じワクチンを使うことが必要で、途中で変更することはできません。

●勧奨接種の取りやめと再開

日本では平成25年（2013年）

4月に法定接種として制度がスタートしましたが、わずか3か月で実質的に中止になりました。正確には「積極的な勧奨はしない」というものです。制度はそのまま残してあるのですが、国が「お勧めしない」というのですから、自治体は動くことができませんとなったというものです。

これは副作用らしきものが大きな社会問題になったからです。

接種後に倒れたり、体の一部が動かなくなったり、けいれんのような動きが始まったりすることがありま

した。それをテレビニュースなどで大々的に取り上げ、「危険なワクチン」というイメージがすっかり浸透してしまい、国の方針になりました。

副作用と言われたものの多くは、予防接種という痛みを伴う医療行為に起因するものであり、ワクチンの内容によるものではないことは、その後はつきりと分かりました。

その原因になったのが「筋肉注射」です。日本のワクチンは皮下注射がほとんどで、私たち医療者も、ワクチンを受ける子どもたちも筋肉注射に不慣れでした。

ちょうどコロナ予防接種が始まる時に、筋肉注射だから怖そう、痛そうと思えたことと同じです。実際には皮下注射よりも痛みは少ないことが分かりました。

接種をする方とされる方がともに緊張している中での注射だったので、色んなトラブルが起きてしまいました。緊張からその場で倒れたり（血管迷走神経反射）、麻痺やけいれんのような状態になったり（予防接種ストレス関連反応）することがあります。いずれもその場で適切な対

応をすることで、安全にワクチン接種を済ませることができました。

9年ほどの歳月が必要でしたが、国はようやく積極的勧奨を再開することにしました。今年4月からです。その方針に基づき、自治体は住民に対して接種券や案内を個別に送付することにしました。

●キャッチアップ接種

接種の対象年齢は小学6年～高校1年ですが、その年齢を超えてしまった女性も接種が受けられるようになりました。（キャッチアップ接種）。平成9年度（1997年度）生まれ～平成17年度（2005年度）生まれの女性が対象です（現在、概ね25歳までの女性です）。

国が実質的に接種の差し控えを指示したことにより接種の機会を逸してしまっただけの方々は、個別に自治体から案内がありますので、どうぞお受けになってください。

またこの間で先に任意接種を受けた方は、自治体が費用を負担する（接種料金をお返しする）ことになりました。自治体にお問合せください。